

報告 セッションC 啓蒙的自然主義の批判と疎外論——マルクス、フォイエールバッハ、シュティルナー

世話人 柏崎正憲（一橋大学）

ヘーゲル左派の思想家たちが繰り広げた思想運動からポスト啓蒙的な社会批判がいかに生成したかに光を当てること——これを目的として本セッションは開催された。当日は、初日の午前にもかかわらず 25 名の参加者を得て盛会となった。この研究構想の背景として、21 世紀にヘーゲル左派研究の新たな潮流が生じているという事情がある。とくに目をひくのは、政治思想史の分野でパウアー研究者の D. Moggach が主導する国際的な共同研究である。20 世紀のレーヴィットやマクレランなどによる研究と比べると、この潮流は思想家たちの個別研究の活性化に貢献しているが、これを先導するモガックは、かなり特殊な解釈枠組を採用している。すなわち、ヘーゲル左派の知的展開は「ポスト・カント的完成主義」として総括可能だということである。この観点において、ヘーゲル左派の知的活動はいわば〈啓蒙の継続〉に還元される。他方で、新MEGA所収の手稿等にもとづく近年のマルクス研究からは、むしろ〈啓蒙からの断絶〉をヘーゲル左派の内部論争（とくにシュティルナーとマルクス／エンゲルスの立場）に見出す試みも提示されている（U. Pagel 2018）。こうした動向をふまえると、そもそも何をもってヘーゲル左派を〈啓蒙の継続〉または〈啓蒙からの断絶〉と評価しうるのかという疑問が生じる。この問題をより厳密で詳細な研究によって解くための、本セッションは予備考察として位置づけうる。

第1報告「啓蒙的自然主義から〈自己形成／自己疎外〉パラダイムへ——ヘーゲル左派の哲学的課題と歴史主義」において、柏崎は「疎外」を（個々の思想家の理論ではなく）ヘーゲル左派に独自の思考法として、しかも「啓蒙的自然主義」と対比される新しいパラダイムとして捉えなおすことを提案した。従来、マルクスやヘーゲル左派の研究において「啓蒙」は、学問的知識の革新運動か、それに関連する歴史的に新しいコミュニケーション様式（知的エリートによる大衆の教導、等）か、そのいずれかとして扱われがちであったが、柏崎によれば、むしろ感性的・知覚的次元における人間本性の再発見が重視されるべきである。そう捉えるとき啓蒙とは、人間の本質を抽出するための「ブルジョワ的」分析手続きの採用というよりも、外面的生活の改善こそが人間の内的自然の十全な発達に寄与するという意識の獲得を指す——人間性の現世的完成を予見するカントの歴史哲学にその体系的表現を見出せるような。それに対してヘーゲル哲学は、この啓蒙的な歴史意識を一面では共有しているとしても、歴史を人間の〈自己形成／自己疎外〉の過程そのものとして把握し、人間本性を（外化されるのを待つだけの内的本質ではなく）行為のなかで不断に再定義されるものとして理解可能にしたという点では、上述の啓蒙的自然主義から断絶している。しかし新たな問題として、人間の世界的な〈自己形成〉の現在の成果を強調するか、あるいは克服すべき〈自己疎外〉の最新の形態として現状を批判するかという選択肢が浮上する。ヘーゲル自身が前者に傾いたとすれば、その若き追随者たちは、それぞれに独自の哲学的課題を引き

受けることによって、独自の道筋をへて後者の選択肢へと転じていった。それぞれが辿った思想的転回の過程を比較することによって、疎外のパラダイムの豊富な可能性と、各思想家の独自性との双方について新たな発見が得られると思われる。(このような構想にもとづいて柏崎は、さらに初期フォイエルバッハの思想形成について短く考察した。)

第2報告「マルクスとヘーゲル左派——フランス啓蒙主義への評価の変遷を巡って」において菊地賢(立教大学)は、初期のマルクスにおいてフランス啓蒙やベンサムにおける功利主義への評価が変化したことの意味を明らかにするために、彼が啓蒙思想家たちやベンサムに言及した文脈——B. バウアーおよびシュティルナーとの論争——を精査した。バウアーの批判においてマルクスは、フランス啓蒙やベンサムによる功利主義の強みを、感性から出発して普遍的なものを志向する点に見出したが、それは(労働大衆の物質的利害関係に立脚する)社会主義・共産主義が普遍的人権の否定だと非難するバウアーの誤りを明らかにするためであった。しかしシュティルナーに対しては、論争の構図がより複雑になる。彼によれば、各人の「能力」を他者への「有用性」として表示する「資産」=貨幣を媒介として、あらゆる外的な評価規準(要件)から解放された諸人格の無支配的「連合」が可能となる。ここで彼はヘーゲルの「有用性」概念に依拠しているが、しかしヘーゲル自身は有用性を自体的存在の見かけをとりながらも他者に対して存在するものとして把握しており、啓蒙は有用なものを自体的存在としてのみ捉えるせいで、そこに「自己復帰的な内容」(自己にとっての自己)を見出しえないと論じている。これをふまえてマルクスは、貨幣がシュティルナーのいう人格的「能力」の評価尺度よりも、むしろ貨幣関係に包摂された諸人格に対する「物象的強制力」であるという見解を引き出すことができた。

討論者の隅田聡一郎(大阪経済大学)からは多くの有益なコメントがあった。まず柏崎の解釈枠組における曖昧な部分や混乱した部分(疎外パラダイムにおける自己形成と自己疎外の区別の意味など)について指摘があった。菊地に対しては、マルクスによる啓蒙や功利主義の批判的受容という文脈においてヘーゲルの影響をさらに精査する必要性があることが示唆された。フロアからも同様に、両報告における曖昧な部分や未解決の部分について質問や、有益なコメントをいただいた。